

I. 宇留田敬一教授と日本の生徒指導研究

私の教育研究の歩み

－昭和20年代の教師の仕事を中心に－

宇留田 敬 一

1. はじめに

私は大学の研究者として、きわめて変わった経歴をもって今日に到っている。大学における生活は、50代の後半から今日に到る7カ年間であり、それ以前にたずさわった仕事は、学校現場における教師や教育行政官の仕事であった。したがって、教育学の研究者である読者にとって、この拙文がはたして役にたつものかどうかは、大変心もとないままに、編集会議の決定に従い、執筆に当ることとなった。

本来、一人の人間の人生行路を赤裸々書き綴った自叙伝は、その文章の巧拙にかかわらず、人々に興味を持たせ、人生の真実に感じさせる何かを含んでいる。しかし、いま私が書こうとする研究の歩みは、決してそのような自叙伝ではないし、赤裸々に経験を書く勇気も持ち合せていないのである。ただ、戦後の学校において、ひとり人間が学校という組織の中でどのような教育活動をしてきたか、そこで何を悩み何を考えてきたか、を紹介することは、学校経営の研究者に何らかの参考になるものが含まれているかもしれないと考えてあえて筆を取ることにした。

2. 新制中学校の一教師として

昭和24年10月、私ははじめて正規の一教員として、東京都中野区立第四中学校に赴任した。それ以前に1年間ほど、都立桜町高校で定時制の非常勤講師を勤めていたが、本格的に教師として勤務するのは、全くはじめてであった。

中野四中は西武新宿線の野方駅から歩いて5分ほどの位置にあり、校庭のまん中を幅4～5mの妙正寺川が流れている牧歌的な雰囲気のある学校であった。周囲は戦災をまぬがれた住宅地であり、新築の木造2階建ての校舎が1棟、川の北側にあり、川の南側の低地が運動場となっていた。私は3年生の社会科を担当させられたほか、校務分掌としては3年の学年付きと清掃用具係を命ぜられた。校務主任(今日の教頭に相当する)のH先生は、清掃用具の整備がいかにむづかしくまた大切な仕事であるかをくどくどと説明してくれた。就職して1週間もすると、学校のかかえている、深刻な問題が自らわかってきた。3年生の5つの学級は、能力別編成になっていて、そのうち2クラスが成績のよいクラスで、あとの3クラスは低い方のクラスであった。後者のクラスで

は学習意欲のない生徒が大半を占め、時には授業の途中でエスケープする生徒もいた。また、3年のF君を中心とする問題生徒グループがいん然たる勢力をもち、20名を越える生徒がグループをつくって教師に反発していた。高下駄で廊下を歩いたり、自転車を廊下で乗りまわしたりして、教師に挑戦することもしばしばであった。教師が注意しても、一向に効果がないだけでなく、もはやどうにもならないと思う教師もいないではなかった。女子の生徒に人気のある若い男子教員が、上記のグループから呼び出しをかけられるという事件も起っていた。数人の気骨のある教師が、かれらの爆発をかるうじて押えているという状況であった。教師間では、もはやかれらを押えることも限界に達しているという考え方が広まり、2学期の途中からでも、能力別編成を改め、生徒や父母の不満・不評の解消を図るべきだという声もきかれていた。成績下位の学級に入れられた生徒やその父母の不満が高まり、その不満が問題のグループを押えることを妨げていた。3年生のクラスの間には大きな溝ができてしまい、生徒集団としてのまとまりや下級生に対するリーダーシップは全く失なわれていたのである。

10月下旬、運動会が終わった翌日、ついに能力別学級編成を解体し、普通学級に編成替をするともに、一部の学級担任の変更が行なわれ、私も新しい3年の学級担任を命ぜられることになった。問題のグループの生徒たちも新しく編成された5つの学級に分散させられ、私のクラスにもいわゆる大物といわれたK君H君が配置された。当然のことながら2人の指導に半年間きりきり舞をさせられることになったのである。まさに戦後の青少年非行の第1のピークが始まった時期であった。

学級担任の私がまず最初に取り組まなければならなかった仕事は、対立してきた生徒の融和を図り、まとまりのあるクラスにすること、2名の番長級の生徒の指導であった。当時、このような問題生徒の指導や学校経営に関する教育書はほとんど刊行されていなかった。同僚の教師が互に情報交換しあったり、知恵を出しあったりしながらも、それぞれの教師が自分なりに問題に取り組んでいくよりほかはなかった。私のクラスでは人望のあるI君が級長になり、少しずつ気分がほぐれてクラスのまとまりも芽生えはじめ、3学期になると学級の秩序はほぼ確立されるまでに到った。しかしその反面、2名の問題児はクラスから浮き上がり、その反発として学級内外で問題行動を起すこともしばしばであった。K君は私の授業中に、あっという間に教室を飛び出し、私が追いかけると、校庭を貫流する妙正寺川を渡って町中に消えるといはなれ業もやっていた。私は宿直の夜、しばしば2人を呼んで、話し合ったり、勉強を教えたりもしてもみた。3学期になると、「オレはどうしても叱られることをしてしまうんだ。先生、またこんども約束を破った。今度は本当になぐってくれ。」という訴えもだされるようになった。私と2人の間に少しずつ気持が通じあってきた頃のことである。しかし、クラスの生徒に対する今のことばでいうツッパリや反発はなかなか消えなかった。その頃、クラスで成績のよい女子の生徒から、「先生は2人のめんどうばかりみているがもっとわたくしたちの進学や勉強のことも考えてほしい。」という

非難を込めた訴えをつきつけられがく然としたこともあった。当時、私については学校中で一番きびしい教師という生徒の評判がすでに定着していた。それにもかかわらず、2名の生徒をもてあまし、押えられないという意味もその訴えには込められていた。3月末、ついに2人はクラスにとけ込むことなく、しかし無事に卒業していった。そのうちのひとりと、数年後町で偶然出会い声をかけると、「いま、オレは先生をしている」という。職業訓練所でメッキの技術を教えているという話であった。もうひとりのK君については、さらにその2、3年後、自殺をしたということをお互いに聞き、自分の無力さを痛感しなければならなかった。

この半年間の短い教師としての経験によって、教師という職業に愛着が生まれ、多少なりとも仕事の楽しさを味わうことができた。職場の先輩、同僚に恵まれたことが、それに大きくあずかっていたことも確かであった。

3. ホームルーム研究への取り組み

この年の前年、すなわち昭和24年という年は、文部省通達によって、中・高等学校の教育課程に、特別教育活動が新設された年であり、またそれとの関係で、「中・高等学校の生徒指導」という大冊の手引き書が刊行された年でもあった。しかし、前述のような学校の状況において、このような文部省の動向など知るよしもなかった。しかし、新しい年度を迎え、新1年生の学級担任になった私は、今度こそは腰をすえてよい学級を育てようと多少の気負いをもって、新入生をまちかまえていた。入学してきた生徒は、3年生に比べるとかわいらしく、無邪気であり、また少々頼りない気もした。けんか、忘れもの、いたずらという程度の問題はよく起ったが、前の3年生の時のように困る問題は全く起らなかった。温厚な学年主任のS先生(家庭科担当の女子教員)を中心にして、6名の学級担任はよくまとまって仕事をした。教師も生徒もホームルームということばに少しづつなれていった。最初は私の小学校時代に経験した学級自治会という程度の理解であったが、再び前年のような苦汁を味いたくないという共通した気持ちが学級担任にあった。とにかくホームルームで子どもたちをまとめていこうということがみな共通の目標となっていた。休み時間はできるだけ子どもと運動場でいっしょに遊ぶ、清掃は子どもと必ずいっしょにする、家庭訪問を全家庭に対して行なうというようなことが、私の考えた学級(ホームルーム)経営の柱であり、特別な目標を立てたり、方法を考えたりすることもなかった。子どもといっしょに遊んだり、作業したり、おしゃべりをしたりすることが楽しかった。前の3年生に比べると、子どもたちは明るく、きちんとしており、例外としてごく少数の子どもがいたが、それぞれのクラスはよくまとまっていた。山の手の中流の住宅地の子どもたちの集りという感じであった。前年に刊行された宮坂哲文氏の「ホームルーム研究」などで知ったアメリカのホームルームをどう自分の学級に生かすかを少しずつ考えはじめたのもこの1年間であった。

4. 学年主任という重荷を背負って

1年生が2年生に進級する際に、学級編成替が行なわれ、私のクラスには学年きっての問題児を引き受けることになった。両親と戦災で死別、親類に引きとられ、学校から帰ると店の手伝いを夜10時ごろまでしているI君であった。学習意欲はなく、よくけんかやいたずらをして、クラスでは担任のS先生からいつも叱られている生徒であった。1年の中ごろ、何か気に入くないことがあり、何人かの女子のカバンを刀物で切るという事件を起しているだけでなく、クラスのみとまりを妨げるような事件をよく起すという生徒であった。このI君をどう指導するか、それとともに、I君を学級の中にどうとけ込ませていくことができるかが、私の学級経営の中心課題となったのである。一方、私は2年の学年主任を命ぜられ、学年全体の経営をも考えていかなければならないという立場におかれることにもなった。この頃になると、職員室の書棚には、ガイダンスやカリキュラムというかた仮名まじりの題名の教育書が並びはじめ、それらを少しづつ私も読みはじめてみた。私には上記のような学級経営の課題があるので、ホームルームをもっと勉強してみようと思い、アメリカ民間情報局の図書室に出かけて、何冊かの本を借りたりもした。マツコーンのホームルーム・ガイダンスやデッチェンのホームルーム・ガイダンス・プログラムの必要部分を拾い読みして、アメリカの中等学校のホームルームのまねごとをも試みたりしてみた。当時、ホームルームといえば、教師のお説教か、話し合いという方法しか用いられないため、生徒にとってホームルームは決して楽しい時間にはならなかった。「私は誰でしょう」というゲームを通して、相互理解や自己理解を深めるという方法を試みたのも、またホームルームのプログラムを作成する生徒の委員会を設けてみたのも、上記の図書に示唆をえてのことであった。また、多分この年であると思われるが、文部省主催の生活指導研究協議会に参加を命ぜられ、当時の生活指導の権威者から講義を受けるという機会も与えられた。このような経験によって、私は生活指導や特別教育活動に対する関心をしだいにのらせていくことになった。

6月に都教委の指導主事の学校訪問があり、ホームルームの研究授業を私が引き受けるはめになった。学校劇の脚本集にある「学校でお菓子をたべる女の子」という題の脚本を生徒が見つke、学校のきまりの問題をとり上げることにした。問題をもつ女子の中学生が、学校にお菓子を持ち込んでたべるという問題を脚本朗読によって提示し、その問題の話し合いを通して、学校の共同生活におけるきまりの意義を考えさせようという計画が生徒との話し合いによって作られた。当日になって、脚本朗読が行なわれたあとの話し合いになると、「先生たちは学校でタバコをすったり、お茶を飲んだりするのに、生徒はお菓子をたべてはいけないというのは不公平だ。」という発言が飛び出して大笑いになり、話し合いは予想外な発展となった。司会の生徒は授業参観の先生方の意見も聞かせてほしいという願いを出して、都の指導主事さんたちを困らせたりもした。

2年の学年経営は順調に進んでいった。1クラスの生徒数60名(今では想像もつかない数字であるが)という学級を、それぞれの担任教師がよくまとめていた。前学年主任のS先生以外はい

づれも20代の青年教師であった。放課後、夜7時8時ごろまで職員室に残って仕事をしている教師も少なくなかった。学校の雰囲気も全体として教育に積極的であり、職員室で交わされる話題も、生徒や勉強や学級経営のことであり、私は職員室というものはそういうものと思ひ込むことにもなった。朝出勤して、夕方5時か6時までの長時間、マラソン競争のランナーのように休むひまもなく仕事を処理しなければならなかったが、それほどの苦痛は感じなかった。ホームルーム(学級)の経営についても、学年会でよく話し合い、共同歩調で取り組んでいった。その一方では、高校進学にそなえて生徒の学力をどう高めるかということが、学年経営の課題であり、業者作成の月例テストを他校なみに用いたこともあるが、めんどうでも自分たちで問題を作ろうという声が高まり、教科の進度に合わせた自作のテストが実施されるようになった。それにもかかわらず、大部分の生徒たちはのびのびと学校生活を楽しんでいたし、それぞれのホームルームは活発に活動を展開していた。私のホームルームでは、問題児のI君はいつの間にか、いたずら仲間のリーダーでありながら、ホームルームでよく活動する人気者となっていた。勉強は相変わらずやる気がないものの、ホームルームの時間となると、積極的に発言し、自分の分担した仕事も進んでやっていた。「先生がホームルームで発言すると、いつのまにか、みんなが先生の言うとおりにになってしまう。だから先生は発言しないでください。」というようなことを、皆の前で言えるように成長していた。親類の家で世話になっている彼にとって、親しい仲間のいる学級は、まさにホームルームであった。仲間と組んでいたずらをして、学級担任の私をあとといわせることも何回かあった。それは彼の私に対する甘えであったかもしれない。クラスの先頭に立って運動会の仮装行列の企画を立てたりして、楽しそうによく働いた。ボーダーラインのK君を何くれとなくめんどうをみるだけでなく、クラスのマスコットであるダウン症のT子ちゃんにもやさしい声をかけたり、笑わせたりしていた。いたずらの好きの学級委員のH君を中心とするホームルームのリーダーの一人として、I君はいつのまにか私のホームルームになくってはならない存在になっていた。

よく遊び、よくさわぐクラスであったが、勉強の方はまずまずであり、ずばぬけた成績をとる子ども1、2名はいたが、クラスの主流や中心ではなかった。遊ぶことと仕事にはみんな積極的であった。当時、どの教室でも冬になると教室に吹き込む砂ほこりに悩まされていた。特に清掃時に床をはくと砂ほこりが舞いあがって困った。ホームルームで対策を話し合うと、しめったオガクズをまけばよいという発言があり、それが決まると次の日にはミカン箱一っぱいのオガクズが教室に持ち込まれていた。また、裏門から校庭を横切る通路が霜柱でぬかるみ、昇降口が泥でよごれ、清掃が手間どって困っていた。このことがホームルームで話し合われ、風呂屋から出る石炭がらをもらって敷くよう、生徒会に提案することが決められた。しかし、生徒会ではどういうわけかこの提案が採択されなかった。では自分たちだけでやろうと誰かがいいだすと、次の日から風呂屋の荷車を使って作業がはじめられ、3、4日で作業をやりとげてしまったこともあった。

5. 生徒が築く学級生活

翌昭和27年の4月、生徒が3年に進級するとともに、再び学級の編成替が行なわれた。I君やH君など、ホームルームの索引車となった生徒の多くが私のクラスに残った。この年、中野区教委の研究校を中野四中が引き受け、ホームルームの研究を全校で進めることになったが、他の学年ではホームルームにそれほど関心をもっているように見えなかった。一方、私たち3年の学級担任は高校入試というきびしい試練を子どもたちとともに受けなければならなかった。幸に、3年の学級担任の大半が2年から引き続いて担任となったため、学年のまとまりや協力体制に問題はなかった。われわれ学級担任が最初に取り組まなければならない問題は入試のための補習授業をやるかやらないかという問題であった。当時、どの中学校でも、週3～4時間の補習をやっていたし、父母も強くそれを希望していた。高校進学者は6割程度であり、進学しない者は補習を受けないことから、進学する者としらない者の間は、暗い差別感情が生じていくことは必然的であった。学年会の話し合いで、補習をやりたいくないという意見が強かったが、一方では生徒の進学がうまくいかないのではないかと不安がつきまとっているため、話し合いは難行した。しかし、ホームルームの成果が上がり、生徒自身が安定した気持ちで勉強に打ち込めるならば、進学もうまくいくという結論をみんなでまとめることができた。はたして、父母や生徒が満足する結果が出るかは、主として教師の1年間にわたる熱意努力にかかっており、われわれ担任教師は重い荷物(試練)を背負うことになった。校長も父母もわれわれの考えを受け入れ、信頼してまかせてくれることになった。

学級担任の人柄や熱意に支えられ学級経営は順調に進み、3年前のような非行問題は全く起こらなかった。勉強の方も多少の心配があったが、生徒はそれなりにやっているようでもあった。テストの成績を廊下に提示して、点数を競わせるというようなことをしないで、何とかなりそうであった。

秋の運動会には3年各組が仮装行列を競い合った。その準備に各ホームルームとも、時間とエネルギーをかけて取り組んだが、生徒たちは受験を忘れて準備に熱中していった。運動会のプログラムの最後を飾る3年生男子タンプリングが終ろうとする直前、私のクラスのS君が鎖骨を折るという思いがけない事故が発生した。もちろん、本人の不注意でもないし、教師の指導の手落ちによるものでもなかった。何回もの練習を重ねた演技をそのとおりに行なった上での事故であった。運動会終了後、体育の教師と二人でS君の家をたずねておわびを申し上げると、両親は快くゆるしてくれた。S君は当然左手が使えず、勉強にも支障があったが、両親はうらみがましいことばを決して口にしなかった。

運動会の終わった頃であった。生徒のカバンやサイフの中の小銭がなくなるという盗難事件が、4～5件続いて発生した。体育の時間に運動場に出る際は、貴重品を職員室に預けるという方法がとられていたが、小銭ぐらいという安易な考え方から、事件が起っていることは明らかであっ

た。そんな空気をきびしく注意したあと、盗難の時の状況を被害者からくわしく聞いてみたが、犯人を割り出すことはできなかった。犯人自身が反省して秘密裡に私に申し出れば、とがめだてはしないから申し出てほしいという私の訴えも空しかった。調べていくうちに、女子の一人がどうもおかしいということで、いろいろと事情を聞いてみた。しかし、盗みをしたという証拠はもちろんない。その生徒を疑ってかかり、自白を求めるといようなことではなかったが、結果として生徒は私に調べられたと感じたことは否定できない。私はその日の夕方、学校を出るとその女子の家をたずね、両親に事情を話して生徒本人にも陳謝した。両親は納得してくれたものの、生徒と私の間にできた溝ははたして修復できるか心配であった。次の日のホームルーム、私は、お金をとった人が十分に反省しているので、盗難事件の調査は一切やめると宣言し、今後もしお金がどうしても必要な人がいれば、他人のものを無断借用せずに、100円札一枚を入れた封筒を書棚の扉の裏側にピンでとめておくので使ってほしいと話した。さらに、生徒間では、今後、盗難事件を一切忘れこれまでのようにみんなが仲よく信頼しあっていこうと励ました。盗みによって学級の仲間の信頼感が失なわれることを生徒たちはよく理解できたようであり、盗難事件はそれ以後全く発生しなかった。(なお、本棚の裏の100円札は、3月の卒業式の日までなくなることはなかった。)

秋の修学旅行は従来の関西旅行という常識に逆らって、信濃路を選んだ。当時の関西旅行には日程等に無理があったからである。第1日目の宿泊は、ひなびた旅館がひっそりと立ち並ぶ別所温泉であり、男女別々の宿舎をとることにした。夕方、男子の学級委員が私の部室に入ってきて、自由時間に思いきり宿舎の中でさわぎたいから許してほしいと申し出てきた。その1時間には、物をこわしたり、宿の人に迷惑をかけないように遊ぶので、先生は生徒の部室に来ないでほしいというのである。終了の時間は厳守する。後始末も自分たちだけできちんとするというので、許可することにした。午後7時になると、3階の部室でのさわぎが、離れの私の部屋まで聞えてくるほどのにぎわいになった。私は約束の手前、部屋でじっと時のたつのを待つよりほか、いたし方がなかった。8時になると、さわぎがぴたっと止まり、やがて学級委員が報告にきた。障子、ふすまなどの破損は一切なし、ただし枕2個がパンクし、宿の人におわびをしてきた、また、後かたづけはきちんとしたとのことであった。

3日目には浅間山麓の鬼押出しで昼食をすませ、軽井沢駅に向った。しばらくして、Tちゃんが急におなかが痛いといって、泣きはじめた。生れてから旅行などしたことのないTちゃんをみんなで見送って修学旅行につれていこうということになり、心配する母親をときふせてTちゃんを連れてきたのであった。まわりの女子がTちゃんにいろいろたずねても、さっぱり要領をえない。私の頭には、もしかすると盲腸ではないか、という不吉な予感がかき消そうとしても消えさらない。Tちゃんを見ると、青ざめた顔が苦痛にゆがんでおり、泣きやむ気配は一向に見えない。やっと駅前にバスが到着、私は病院に連絡をとったり、乗車の準備をさせたりして、Tちゃん

の世話はクラスの女子がしてくれた。しばらくベンチで休んでいたTちゃんは、しだいに元気をとりもどし、もう大丈夫といいだす。そのうちに、女子のひとりがTちゃんはバスによったのじゃないかといいだす。Tちゃんの顔はしだいにいつものようにここに顔になり、みんな大笑いとなる。車に酔うということばはTちゃんの「語り」になかったのである。それにしてもこの3日間、生徒たちはよくTちゃんの世話をしてくれた。帰りの列車の中で、楽しそうなTちゃんの顔を見ながら、生徒たちを本当にありがたいと思った。

翌年2月の高校入試は、それまでにないよい結果となり、補習以上にホームルームや日々の授業の充実が学力を高めるために有効なことがわかった。

卒業式をひかえ新しい問題が学年に起った。卒業式中野区長賞を出すので、受賞する生徒を選んではしいという依頼が教委から来たのである。3年の学級担任の多くは、成績のよい優等生に賞を出すことに反対であった。といて、区教委の意向を無視することも角が立ちすぎると考え、話し合いが難行した。結局のところ、だれを受賞者とするかは学級担任へ一任、成績の優秀な者にかぎらず、適切な受賞者を学級担任が選ぶ、ということでみな意見がまとまった。校長もこの方針を快く承知してくれた。私のクラスには、戦災で両親、家族を失った2名の男子生徒がいた。前述のI君ともう一人、F君であった。2人とも親類の家で働きながらも、中学校に学び、9年間苦労を重ねてきた生徒である。F君の成績は中ぐらいであり、定時制高校に進学も決っていた。区長賞の受賞者をF君に、I君には当時の卒業式でいちばん荣誉を担う学級総代の役割をさせようと私は考えた。クラスの生徒にこの話をする、みには快く賛成してくれた。卒業式当日、I君はそれまでには見たこともないような真面目な顔をして壇上に上がり、校長から卒業証書を受けとると、期せずして大拍手が起った。

6. 再び1年の担任に

4月、1年生の学級担任と1年の学年主任を命ぜられ、再び1年生を迎えることになった。すでに、2月には「1日入学」という試みをしたり、3月には「新入生のしおり」(ガリ版刷数ページのプリントに学校やホームルームの紹介をしたもの)を配布しているので、新入生の受け入れは順調に進んだ。特に新入生の父母の中には、卒業させた3年生の父母もかなりいたので、入学式後の父母会では、学年学級経営の方針をよく理解していただくことができた。

1年の学級担任はその大半が前年度3年の担任であったため、ホームルームを重視した学年、学級経営をするという方針はすでに立てられていた。4月の入学式後の1週間は、毎日1時間をホームルームに当て、ホームルームの充実を図る計画も立てられていた。私のホームルームでは、第1日目は自己紹介とソフトボール、第2日目はホームルームの目標設定、第3日目は係りの組織というようなプログラムによって、ホームルームのスタートを円滑にしようと考えたのである。1日目は順調に進んだが、2日目のホームルーム目標の設定では思いがけない苦汁を飲まされる

ことになった。

私はホームルームの目標を設定するためには、ひとりひとりの願望を引き出し、それらを集約してホームルーム目標を立てさせたいと考え、予めどんなホームルームにしたいか、ホームルームのみんなで何をしたいかなどを原稿用紙に書かせ、前日に提出させたのである。私のそれまでの経験では、ホームルームの目標というと「協力」とか「責任を果す」というような小学校時代の形式的な学級目標を生徒はすぐ持ち出してくるので、それを打破するために上記のような課題を与えたのであった。しかし、生徒の書いてきたものは、それまでの目標と大同小異であった。ひとりだけ、I君は「みんなといっしょに魚釣りをしたい。」と書いていた。それを読んだ私は、なんて不真面目なことを書く奴と思って憤慨さえ感じた。ホームルームでは、当然のことながら私の期待するような話し合いは生れてこなかった。ホームルームとは何か、ホームルームの目標をどう考え、どのようにして作らなければならないかをくどくどと説明し、何日かのあと、ようやくそれらしいものを設定することができた。しかし、どれだけ、目標が生徒のものとなっているかは心もとなかった。学級の組織としては、ホームルーム長、学級委員、プログラム委員などの役割が作られ、そのほかに係りグループと生活グループの両方の機能をもつ班が編成され学級の全員がそれに所属することにした。プログラム委員は私とともにホームルームのプログラムを検討し、原案をホームルームに提出する役割をもっていた。ホームルームで何を題材として取り上げるかを教師が一方的に決めるのではなく、生徒の意向を十分にプログラムに生かすことが必要と考えたからである。

このようにして、私のホームルームはまづまづのスタートを切ることができた。3年前の1年生の時と比べると、はるかに形式的には整えられたホームルームであった。生徒の多くはホームルームに積極的であり、仕事もよくやっていた。小児麻痺のため手足の不自由な男子が1人、IQがボーダーラインの男子が1人いたが、いじめられるようなこともなく、みんな明るく、のびのびと学校生活を楽しんでいた。しかし、2ヶ月ほどたつと、魚釣りをしたいという希望を出したI君とは、何となくしっくりいかないことに気がついた。体は小さいが、けんか上手で腕力のあるI君はよくけんかをしたり、女子を泣かせたりして、みんなからきらわれ、しだいに孤立するようになっていた。I君にとって、学級担任の私のいうことをよく聞くクラスの生徒がおもしろくなかったのであろう。また、勉強が苦手なI君にとって、規律がきびしいクラスに反発もしたかったのであろう。クラスの仲間と魚釣りがしたいというのは、I君のまさに本音であり、クラスの友だちとはまず第一にそのような遊び仲間とI君は考えていたのであろう。当時の私には、このようなI君の気持ちが理解できなかったのである。2学期になると、女子の生徒から、理由もないのにI君にふたれた、けとばされたというような訴えが時々持ち込まれた。負けていないで、I君にそのようなことをやめるように注意なさいという注意してもきかないし、ホームルーム長のO君にいてもだめだという。私がI君を呼んで事情を聞くと、I君は

I君なりの言い分があり、それをいったあと、これからはしませんという。しかし、I君の弱い者いじめはなくならなかった。2学期の中ごろ、3名の女子が私のところに来て、もうI君には我慢ができないので、みなでホームルームの時間にI君の暴力に対して抗議をしたいが、許してほしいという申し出がなされた。ホームルーム長のO君に事情をきいて、女子の申し出を許すことにした。ホームルームの話し合いがはじまると、女子から、I君の暴力を非難する発言が次々に出され、I君は最初のうちは勢よく反論していたが、しだいに女子に問いつめられ、ついにI君はみなにあやまり、暴力は振わないという約束をした。そのあと私はI君のこれまでのことは水に流し、仲間のひとりとして仲よくしてあげてほしいという、生徒たちはいっせいに拍手をして、私の意見に賛成してくれた。I君の問題が解決したことで、クラスの生徒たちはいっそうホームルームに意欲を燃やし積極的に取り組んでいった。この頃になると私にもホームルームがおもしろくなり、ガイダンスのためのプログラムの開発も試みてみた。アメリカの集団指導学級で用いられ、特にガイダンスの集団的方法としてその有効性が認められている事例協議会法をいくつかの題材に用いてもみた。また、Voice of Experience という方法(一種の匿名の身の上相談)も試みてみた。ホームルームがとすると話し合いや教師の講義という方法に限定され、生徒にとっては退屈な時間となっているのを何とか改善したいと考えてのことであった。

この年の秋に、同じ1年の担任であったK先生と協力して、ホームルームの評価のための質問紙法による調査を行なった。教師と生徒、生徒同志の人間関係に関する質問を含む十数項の質問について生徒の回答を求めるといふ素朴なものであったが、2クラスの比較ができて学級担任にとってはよい反省材料となった。こんなこともあって、心理学の勉強を少しづつはじめることになった。

7. 新設校の校務主任に

翌年の昭和29年4月、新設校の中野区立十中に転任を命ぜられ、校務主任となった。当時、教頭制度が確立されていない時期であり、今日の教頭とはほぼ同じ役割を担う教師を校務主任と呼んでいた。H校長は40歳という若い校長であり、それに伴って若い校務主任として私を希望したということは、あとで知った。その頃、中野区教育研究会がすでに発足しており、その生活指導部会に所属していた私は、当時教頭であったH校長と顔をよくあわせたこともあり、お互いに気心がある程度通じている旧知の間柄であった。かくて35才という若い新米の校務主任が誕生したのである。

新設校といっても、校舎が秋に完成するまで、堀越学園の一部を借りての開校であった。教室の整備のため人手が必要であったが、区からその予算がもらえないので、私が中野四中で三年間担任した生徒たち十数名が労働奉仕をしてくれた。大小とりまぜた4教室が何とか、1年生300名余りの新入生を迎えるまでに整えられた。

教員は校長と私のほか、9名であり、1名の家庭科女子教員のEさんと美術のS君を除くと、みな20代の若い教師であった。そのうち2名は校長の前任校の教師であり、1名は教育実習をその学校で受けた教師であった。事務主事のS君も20代の若さであり、職員室の雰囲気は他にあまり例のない若やいだものであった。校長と私とS君以外はみな独身であり、女子教員2名と男子教員2名は大学を出たばかりの新採用教員でもあった。校長はこのような若さのあふれる職員室の雰囲気を楽しんでいたし、私も若い教師に時には苦言を呈しななければならないことはあっても、かれらの中にとけ込むことに無理はなかった。

H校長は積極的に学校経営に取り組み、次々に問題を教職員に投げかけ、学校の体制を整えていった。教育目標、教育方針が全教師の討議によって設定されたり、新しい校舎の利用計画や校庭の整備についても、教師の意見を取り入れたりした。生活指導については、多少の異論がないではなかったが、校長の経営方針に即し、その成果の実るように努力することは校務主任の立場であると考えた。

秋になって、待望の新校舎が完成し、引越しが行なわれた。校庭の整備が区の失業対策事業費で行なわれ、11月には運動場らしいものができあがった。野球の好きなH校長は、放課後になると若い教師や生徒を相手に、野球を楽しむことが多くなった。職員室で係りの打ち合わせをしたり、事務の整理をしたりしている教職員に対して、時としてはぐずぐず仕事をしていないで、早く運動場に出てこいという声が校長からかかることも度々であった。このような明るい雰囲気が、教職員や生徒のまとまりを促進し、学校づくりは順調に進んでいった。

H校長は区教組の書記長をしたこともあって、組合活動には理解があり、スト以外については教職員の組合活動を押えるようなことはなく、むしろ支持するほどであった。教職員の親睦会では用務員も全く同等のメンバーとして扱うことで、職場の雰囲気は活気があり、新米の校務主任が人間関係で苦勞するということではなかった。校長と校務主任の意志の疎通を図るため、週に1回1時間ほど2人だけで話し合う時間を持つとういうことが、両者のどちらからともなく言い出され、実行されていった。

この頃「教育技術連盟」の理事長野瀬寛顕氏のきもいりで、「日本青年教師の会」の設立の話がはじまった。教育技術連盟の下部組織でなく、独立の教育研究団体として、教育技術連盟と提携し、若い教師の教育実践を支える活動を行なおうという趣旨が確認され、8月には第1回研究大会を開催しようということになった。発起人が中心になり中央委員会が組織され、私に中央委員長になるようにという要望が出され、H校長の許可を求めることになった。H校長は中央委員長の就任を快く承知してくれたが、その寛容さにこたえるために、校務主任としての仕事には手をぬかぬよう細心の注意が必要であった。

第1回大会には全国からの参加者が約140名に達し、3日間円覚寺で起居をともにする研究会が繰り広げられた。大会の講師としては、朝日新聞論説委員の伊藤昇氏、お茶水大の吉田昇氏のよ

うに記憶している。当時は、日教組と文部省との対立緊張がしだいに高まりはじめていた時期でもあった。その対立を越えて、教育実践に取り組もうという会の方針を貫きながら、会員の研究活動を充実させていくという会の運営は容易ではなかった。しかし、会員はしだいに増加し、関東近県にはいくつかの支部も組成されていった。私の勤務校からも会員となった2名の教師がいたが、私はそのほかの教師にはあえて入会を勧誘はしなかった。

翌年4月には、新入生を迎え、1、2年生600名を越える生徒数となり、教職員も2倍になり、学校運営は複雑さを増していった。しかし、学校の雰囲気は1年の間に築かれ、動揺することもなかった。校務主任としては、教務主任や生活指導主任に大いに活躍してもらい、必要に応じて相談相手になって助言をしていくことで、学校運営は順調に進んでいった。しかし、例外的にはあるが、長欠生徒に手を焼いている学級担任に代って家庭訪問をし、民生委員や区の福祉課と交渉するようなことも必要であった。時には、新採用教員の学級経営の相談相手となったりもした。

H校長はアルコールに弱いため、何かと若い連中にさそわれたり、さそったりして酒を飲むことが多くなった。特に事務主事のS君とは、仕事の関係もあり、よく飲んだが、そのような時のS君の話には、校務主任として教えられることが少なかった。(S君は決して教職員のプライバシーを犯すような話はしなかったが)

翌年(昭和31年)4月には、再び新入生を迎え、1、2、3学年がそろい、教職員数もさらに増加した。校庭の整備も失業対策事業の人たちのおかげではほぼ完成し、花壇、池などが学園らしい雰囲気をかもしだしていた。しかし、新宿からはほど近い校区という事情もあって、問題を起す生徒もでてきた。若い教師の魅力や熱意だけで、すべてがうまくいくものでないとわかっていても、具体的に学校経営でどのような手を打っていけばよいか問題であった。とにかく、生徒のなまの姿をとらえなければと思い、職員室の清掃に来る生徒とは仕事をいっしょにしながら、何かをつかもうともした。また毎日1回、日課として校舎をまわることになっていたが、校庭にも足を伸ばしてみた。一方、PTAを通して、地域からの情報を提供していただくこともできた。時々用務員室に出かけて、雑談をしている中で、2人の用務主事さんから生徒の実態をとらえた話を聞くこともあった。それらの情報を必要に応じて、生活指導主任や学級担任に流していくことが私の大切な仕事の一つとなっていた。

教職員が増えることによって、人間関係も複雑になり、微妙な問題にも配慮しなければならなくなっていた。開校時の若い教務主任や生活指導主任はそのまま学校運営の中心的な役割を果していたが、あとから入ってきた教師の中には年齢が上のものも何人かはいた。そのような教師がうまく教師集団にとけ込んで、積極的に活動できるよう配慮することも必要であった。しかし、このような問題のほとんどは校長をわずらわすことなくして、解決していったが、それは教師集団の雰囲気と各人の良識によるところが大きかった。新採用の若い教師も何人かいたが、このよう

な職場の雰囲気の中で、のびのびと明るく成長しているように見えた。

日本青年教師の会は2年目を迎え、中央の月例研究会や地方支部の研究会が活発に行なわれ、その仕事もしだいに忙しくなっていた。生活指導の講師として、東大助教授の宮坂哲文氏をお願いしたことから、宮坂さんと接する機会がふえていった。特別教育活動に関する広い学識や生活綴方などに関する教師の実践に学ぼうとする態度に感銘をうけることがしばしばであり、ますます宮坂さんへの傾倒を深めていった。この頃、朝日新聞の学芸欄に日本青年教師会の紹介をかねた生活指導に関する提言を書く機会が与えられたが、その内容は宮坂さんに負うところが大きかった。

翌年1月に入って、東京都教育庁から校長に対し私を都教委の指導主事に取りたいという話が持ち込まれ、指導部から安藤新太郎課長が学校を来訪されることになった。安藤課長は一応私の授業を見たいというので、2年の生徒を借り、事例協議会法を用いたホームルームの授業を行なった。生徒は意外によく発言してくれて、安藤課長のテストには一応合格ということになった。かくて第1回生の卒業式を目前にして、2月16日付で都の指導部に転任ということになり、校長はじめ学校には大変な迷惑をおかけする結果となってしまった。「学校の方は何とかなるから、心配するな。」というH校長の暖かな励ましがありがたかった。

8. おわりに

昭和24年から31年にかけての数け年に及ぶ中学校教師の経験は、私にとって忘れがたい思い出である。その経験の一部分を書いたことは、これまで2、3回はあったが、それらを通して公表するのはこれがはじめてである。書き残したことも少なくないが、これがせいっぱい、というのが正直なところである。書き終って感じることは、書きたくとも書けないこと、自分にとって都合の悪いことでお書かなければならないことが少なくないということである。それはともかくとして、できるだけ事実を客観的に記述しようと努めたつもりである。しかし、すでに30年もの歳月によって記憶そのものが風化していることも否定できない。子どもたちの作文や同僚の教師などの反応なども取り込みながらまとめられる教師の実践記録ほどの価値がない回想録となったことをおゆるしいただきたい。いまさらながら、実践記録をとることの大切さとその困難さを痛感するとともに、それらを生かした教育研究方法の開発を改めて考えてみたいと思う。

付, 宇留田敬一教授研究業績目録

著 書

- 「中学校道徳指導の計画」 昭和33年, 明治図書
- 「内面化をすすめる道徳指導」 昭和40年, 文教書院
- 「生徒指導入門」 昭和45年, 明治図書
- 「集団活動の理論と方法」 昭和49年, 明治図書
- 「学級会活動の改造」 昭和51年, 明治図書
- 「特別活動論」 昭和56年, 第一法規

編著等

- 共編著「生徒会活動の指導記録」 昭和32年, 明治図書
- 共編著「講座・生徒指導」全5巻 昭和42年, 明治図書
- 編 著「生徒活動の実践研究」全3巻 昭和46年, 明治図書
- 共編著「教育課程の編成と改善」全2巻 昭和47年, 第一法規
 - 〃 「学校と教科外活動」(現代教科教育学大系第9巻) 昭和49年, 第一法規
 - 〃 「生徒指導の研究と実践」全4巻 昭和51年, 文教書院
 - 〃 「中学校学級指導の展開と資料」全3巻 昭和52年, 文教書院
 - 〃 「講座特別活動の新展開」全6巻 昭和54年, 明治図書
 - 〃 「新教育を創造する学校経営」全6巻 昭和55年, 東京書籍
 - 〃 「特別活動の実践研究」全6巻 昭和56年, 明治図書

論文その他

略